

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第783回東京定期演奏会

2026年 9月11日(金) 19:00 開演
9月12日(土) 14:00 開演
サントリーホール

プレートク 山本 明尚氏 金曜日/18:30~
土曜日/13:20~

■1回券料金

S ¥10,000 A ¥8,500 B ¥7,500 C 完売 P ¥5,000 Ys (25歳以下) ¥2,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。

助成:



文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
独立行政法人日本芸術文化振興会

カーチュン・ウォン×日本フィル ショスタコーヴィチ第3弾

ショスタコーヴィチ:
交響曲第7番《レニングラード》
ハ長調 op.60



指揮:カーチュン・ウォン[首席指揮者]
※当初の予定から指揮者が変更になりました。

次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

カーチュン・ウォン編

きき手 八木 宏之

——第783回東京定期演奏会では、来日が叶わなかったアレクサンドル・ラザレフさんの代役として、ウォンさんがショスタコーヴィチの交響曲第7番《レニングラード》を指揮されます。ウォンさんは2023年12月の第756回東京定期演奏会でもラザレフさんの代役として、ショスタコーヴィチの交響曲第5番を指揮されていますね。

私は首席指揮者として、日本フィルハーモニー交響楽団に対して強い責任感と揺るぎない思いを抱いています。かつての首席指揮者が出演できなくなった場合、聴衆の皆様を失望させることなく、またオーケストラが継続性を持って歩み続けられるよう、可能な限り代役を務めることが重要だと考えています。

マエストロ・ラザレフと日本フィルの関係は特別なものであり、オーケストラの芸術的アイデンティティの重要な一部をなしています。ロシア音楽のレパートリー、とりわけショスタコーヴィチの作品において、彼がこのオーケストラとともに築き上げたものに、私は計り知れない敬意を抱いています。ですから私にとって今回の代役は、オーケストラ、マエストロ・ラザレフ、そして長年にわたって日本フィルを支えてきたお客様への敬意を示す場でもあるのです。

——日本フィルにとって、ショスタコーヴィチは重要なレパートリーであり、ラザレフ時代から十八番といえるものでした。

私はショスタコーヴィチが日本フィルのDNAの一部になっていると強く感じています。もちろん、そのアイデンティティの大部分はマエストロ・ラザレフによって形作られました。日本フィルは、ショスタコーヴィチの音楽言語を深く理解し、これらのレパートリーに対して感情的な献身を示します。私たちがショスタコーヴィチと共に演奏するとき、私はこのオーケストラの集団的記憶のなかにあるものを呼び覚ましているように感じるのです。

——マエストロが日本フィルと取り組む3曲目のショスタコーヴィチの交響曲である第7番は、作曲家の戦争体験に基づく作品です。第1楽章展開部のいわゆる「戦争の主題」は、ショスタコーヴィチらしいアイロニーと仄めかしに満ちていますが、マエストロはこの主題をどのように解釈されていますか?

スターリン時代、ショスタコーヴィチは秘密警察に逮捕されることを常に恐れていました。彼は恐怖と不確実性のなかで生きた作曲家だったのです。それにもかかわらず、彼の音楽は決して弱々しいものではなく、そこには勇気があり、皮肉があり、人間性があります。その複雑さこそが、ショスタコーヴィチの音楽を感動的なものにしていただと思います。

「戦争の主題」はごく平凡なものとして始まり、徐々に恐ろしいものへと膨れ上がっていきます。あの反復的な行進曲は、特定の軍隊や思想、国家よりも、むしろ暴力そのものが持つ恐るべきメカニズムを描いているように感じられます。最初、この音楽はどこか滑稽で、表面的に聞こえます。オペレッタの引用や、機械的な反復は、グロテスクで不条理に感じられるでしょう。まさにそこに恐ろしさがあります。この交響曲における「悪」は英雄的に登場するのではなく、日常的に、機械的に、そしてほとんど人格を持たないかたちで現れるのです。この音楽は、暴力がいかにして、社会の内部で常態化していくのかを描いています。

——第7番で重要なのは、作品に描かれているレニングラード包囲戦をショスタコーヴィチ自身が実際に体験したという点です。そこには揺るぎのないリアリティがあります。

これはショスタコーヴィチにとって抽象的な歴史ではありません。レニングラードは彼の故郷であり、家族や隣人たちの暮らす場所であり、日常そのものだったのです。包囲戦の初期には、彼は消防隊に志願し、抵抗の象徴的存在となりました。ですから、この交響曲には、皮肉や政治的な含意の下に、非常に誠実なメッセージが存在しているように思います。それは、極限状態にあってもなお、市井の人々の尊厳を守ろうとする、ひとりの作曲家の姿です。

だからこそ、この交響曲は今日でも聴衆の心を強く揺さぶり続けるのでしょう。ソビエトの歴史を詳しく知らない聴き手であっても、そこに恐怖や疲労、希望や悲しみ、そして忍耐を見出すことができます。最終的に、この作品は政治を超越し、深く人間的な作品となっているのです。この交響曲の感情的な頂点は、実は最も静かな場面にあります。私は聴衆の皆様にも、第7番の悲劇性だけでなく、その人間性を感じ取っていただきたいと思っています。この交響曲は究極的には「生き延びること」を描いた作品であり、人々が歌い続け、記憶し続け、闇のなかにあってもなお人間であり続けることについての物語なのです。